



【理想的な森林の循環サイクル】植えて、育てて、収穫し活用する。森の若返りを図るためにこのバランスを維持していく。1サイクルで40～50年程度のスパンとなる



【伐採後に植林をしなかった森林(市内某所)】単なる伐採のみで植林をしないケース。この光景を後世に残したいだろうか



【管理不全森林に投棄されたごみ(市内某所)】ごみの不法投棄の大半は、人目のつきにくい山林に捨てられる。見通しの悪い環境だと投棄ごみも発見しにくくなるため、投棄者の標的に。反対に、普段からきれいに管理されている場所は、人の出入りを予見させるのでごみも投棄しにくい



【管理されずに荒廃した森林(市内某所)】晴れの日であっても光が入らない暗い森。間伐を怠ると、木々の成長に伴って内部が過密になり、日照が不足する。光が入らないことによって下草も生えないため、多様な生物環境も生まれにくい



那須塩原市森林組合 八木沢 義雄 統括

## 日本の森林もいわば「少子高齢化」。森の循環を生むための管理は人間と森、双方に必要なこと——

### 第二章

# 危機

世界的に問題視される森林の大量消失。森林大国・日本でも多くの森林が危機にひんしている。その原因は、森林の管理不全による生育不良と高齢化だった。

### 森林社会も高齢化 「植・育・伐」の循環が肝

林野庁「森林資源の現況」によると、日本の国土の約7割を占める森林面積は、50年以上ほとんど変化していません。うち、約4割を占める人工林の半数が40～45年とされる伐採適期を超えています。

「木も人間と同様、高齢になると活動量が低下します。日本の人工林の多くがスギやヒノキ。それらは40年ほど旺盛に成長した後、次第に活動量が減りますが、二酸化炭素の吸収量も成長量に合わせて減るとされています」と話すのは、長年市内の森林整備に携わってきた、那須塩原市森林組合の八木沢さん。

「日本は森林社会までもが高齢化しており、管理が十分とは言えません。森林を若返らせるためには、植林・育林・伐採の循環を生むための管理が必要で」と、さらなる森林整備の必要性を訴えます。その言葉どおり、森林資源量を表す「森林蓄積」は一貫して増加し続けており、

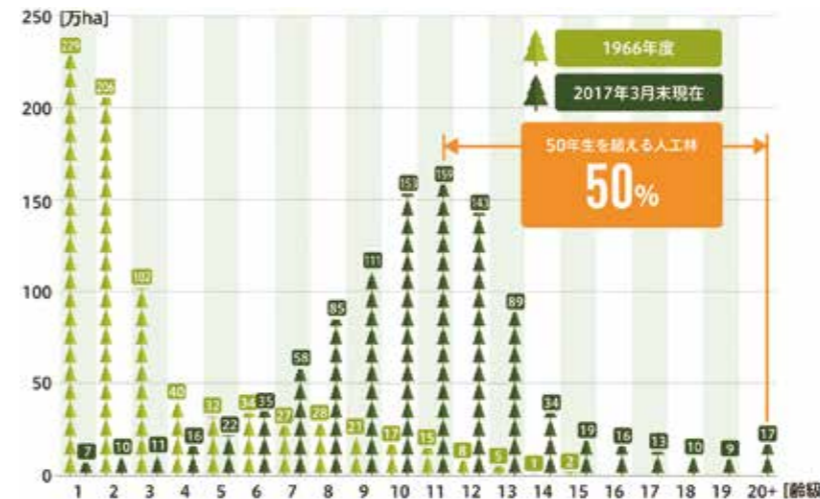
これは十分な伐採がなされていないことを示しています。地球温暖化対策を進める上でも、森林整備は重要な取り組みと言えます。

### 輸入木材の流入 国内林業の衰退

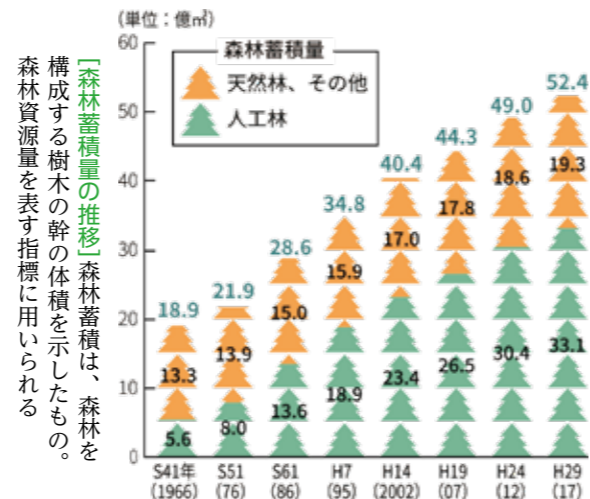
戦中・戦後の木材需要の急増に伴い、国内森林の多くを伐採してきた日本。造林政策を並行して進めたものの、木材需要に国産材の供給が追いつかない状況でした。それを補うために始まったのが、原木を中心とした木材の輸入です。輸入の自由化によって安価かつ安定的に供給されるようになった輸入材は、製材業の発展に寄与することとなりますが、一方で国産材の供給は減少の一途をたどることに。さらには、山村の過疎化や高齢化なども相まって、国内の木材供給は次第に輸入材主導となりました。これに伴って国内林業の低迷が叫ばれるようになります。八木沢さんは、輸入材の必要性を理解しつつも、今以上に国産材に目を向けるべきだと言います。

### 木も人間と同じ

木は人間のようなものだと言っている八木沢さん。「意外と知られていませんが、木がきちんと生育するには、人間のパーソナルスペースと同じように一定の距離が必要です。生育に



【森林の年齢を表す齢級】林齢を5歳単位でくくって、森林や木の年齢を表したものを「1齢級」とする。9～10齢級前後が伐採適期とされる



「森林蓄積量の推移」森林蓄積は、森林を構成する樹木の幹の体積を示したもので、森林資源量を表す指標に用いられる

は太陽光が必須ですので、植林後、下草に負けない大きさに育つまでは毎年、下刈りを行います。その後も生育を阻害する蔓性の植物を除去する蔓切りや、密集したままだと光の奪い合いをしてしまうので3～5年ごとの除伐、30～40年生になるまでのおおむね10年ごとの間伐と、結構手間がかかります。木は、放っておけば適切に育つわけではありません。管理せずに放置されたままの木々は細く育ち、木材としての活用も難しくなります。

樹齢を重ねた大きい木々がたくさんあればいいというものでもないようです。森林社会も、循環を念頭に整備を行うことが大事なのです。